
コズミック・イラにスパロボOGの機動兵器を持って介入する。

たっくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コズミック・イラにスパロボOGの機動兵器を持って介入する。

【Nコード】

N2030V

【作者名】

たっくん

【あらすじ】

よくある転生というか転送ものです。スパロボファンの青年が事故で死んで神様にコズミック・イラの世界に送られます。設備環境はチートかもです。C・E・55年から始まるのでしばらくはガンダムのがの字も出ませんがよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初投稿です。宜しく願います。

ブローグ

「ふう、終わった」そう言いながら僕はP S 2のコントローラーを手放した。今僕は『スーパードット大戦O G 外伝』の最終話をクリアした所だ。達成感と少しの疲労感を感じながら余韻に浸りながら、思考は最近発表された新作『第2次スーパードット大戦O G』に向く。ハードがP S 3に変わったからP S 3買わなきゃいけない、お金貯めとかなないとくとか考えていると、突然部屋が揺れ出した。「なっ？地震！？しかも結構大きい！！」

これはヤバいかと思った瞬間、爆音が起こり僕の意識は途絶えた。

プロローグ（後書き）

この先はノートに下書きしますので近日中に更新します。

神様と説明と選択肢（前書き）

まだ本題に入れないですが気長に読んでくれると嬉しいです。

神様と説明と選択肢

「・・・んあ？」

目が覚めると辺り一面真っ白な空間。何とも現実味に欠ける。

「何だここ・・・はっそうか夢か!？」

と内心パニックしながら自分を落ち着かせようとしていると、頭上から声がした。

「降臨!満を持して!」と言いながら、全身を純白の衣装に包んだ銀髪の美しい顔立ちの青年が白い羽根を撒き散らしながら、宙を降りてきた。

「うわ・・・」

この時の僕の感想はこうだった。(何コイツ、何処の鳥王子だよ。声も三木眞一郎さんそっくりだし)

そんな事を考えていると鳥王子モドキは眉を顰めて口を開いた。

「無礼な思考をしおつて。私は神であるぞ。頭が高い!」

と、偉そうに言う神(自称)。いやしかし神が何でわざわざ僕みたいな一般人の前に現れるのさ?

「それが私の役割なのだ。神といってもその格は千差万別でな」

「ああ、つまりあなたは神の中じゃ下っ端なんですね。っていうか人の思考に突っ込まないで!」

「私の話を素直に聴けば良いのだ。さて話を戻すが、そなたは死んだ。そこは自覚しているか？」

「あ、やつぱりですか?そうじゃないかと思いましたが」

「うむ、そなたの隣の住人はいわゆる過激派の構成員でな、爆弾を作っていたのが地震のために手元が狂って爆発したのだ。そしてそなたが巻き込まれた訳だな」

「えー?お隣さんそういう人だったの?僕死に損?なんでさ?」

「納得出来ぬのも仕方ないが、こちらにしても予定外だったのだ。

悪戯好きの天使がそなたの人生記録を適当に弄りおつたためにこう

なつてしまった。全く・・・」

「うん、とりあえずそのふざけた真似してくれた天使を出せ」

「既に罰として地獄に研修に出した。連れ戻す訳にはいかん。そなたへの補償は私が請け負う」

むう、納得はいかんが仕方無い。

「じゃあ神様は僕に何をしてくれるんでしょうか？」

うむ、丁度実験用に創った世界が3つあってな、そのどれかに特典つけて送ってやろう。選ぶが良い。

1・アストラギウス銀河。特典：専用ベルゼルガと母艦一隻

2・型月世界。特典：無限魔力

3・コズミック・イラ。特典：バンプレストオリジナルメカとクレイドル

いやこれ・・・どこも死亡フラグ満載な世界じゃないですか。しかもアストラギウス銀河無理ゲーっぽいし、かといって型月世界はあまり知らないし。

「んーじゃあ、コズミック・イラで。これが一番望みが持てる」

ていうかこれだけ特典が豪華だ。あ、もしかしてはめられたか？

「特典の差はその世界での役割に合わせたの物だ。他意は無い」

ああそうですか。

「それでその世界での僕の役割って何ですか？」

「この世界の場合は、その役割を見つける事から始まる。ヒントは与えるから精々考える事だ。では行くがよい」

そう神が言つと僕の意識は薄れていった。

神様と説明と選択肢（後書き）

次回、神様からのサプライズがあります。

ネコとサプライズと最初のヒント

「・・・人、御主人、起きるニヤ〜御主人〜」

てしてし、と何か柔らかい物が頬を叩く感触と声に意識が覚醒する。上体を起こして周りを見渡すと、自分はベッドに寝ていたらしい。

そしてそのベッドの脇に、僕を起こした者が立っていた。身長は1m程、全身柔らかそうな毛皮に覆われていて、お腹に肉球型の模様がある。愛らしいくりつとした眼にピンと立った両耳。簡単に言うると二本足の猫。それが二匹立っていた。片方は白、もう片方は茶色い毛色である。

「・・・アイルー？」

二匹？二人？はコクリと頷き、白い方から自己紹介を始めた。

「はじめましてニヤ。僕は御主人の生活のお世話を担当するオモチですニヤ」「ボクは御主人の仕事のお手伝いを担当するワトソンですニヤ。」

そして二匹揃って、

「これからよろしく願いますニヤ！」とお辞儀する。うわ、超可愛い。「撫でてもいい？」

「ニヤ？」

それから二十分程、二匹のアイルーの毛並みを堪能して、今いる場所についてワトソンから説明を受ける。それによると、ここは海底に建造された人工冬眠施設、マリンクレイドルの一号だという。一号というだけに二号と三号もあり、月にはムーンクレイドルがあるそうだ。

現在この4つのクレイドルはマリンクレイドル一号を拠点として使用し、他のクレイドルは予備として最低限の稼働率で運用されているのだそうだ。

「それですニヤ、神様からのメッセージがありますニヤ」そう言

われてクレイドルのコントロールルームへ向かう。

ワトソンの先導に従ってしばらく通路を歩いてエレベーターに乗って、また通路を歩いて、コントロールルームに辿り着く。中に入ると、そこはいかにも指令室とか発令所といった感じの部屋だった。椅子に座り、パネルに向かって何か作業をしているのがアイルーである点を除いては。

「え」と、此処には僕以外に人がいない代わりにアイルーがいるって事？」僕の質問にワトソンが答える。

「まあ、そう言う事ですニヤ。今クレイドルの管理は約2000匹のアイルーで行っていますニヤ」

2000匹で・・・此処は猫好きの為の天国か？

「それはともかく、神様からのメッセージを再生しますニヤ」ワトソンがそう言うのと正面のモニターが映像を映し出した。

「この映像が再生されているという事は予定通りに転送されたと見て良かるう。さて、そなたに授けた特典について詳しく説明しよう。まず拠点としてマリנקレイドルを地球上の三箇所に用意した。そして月にムーンクレイドル。知っているだろうがいずれも本来の人工冬眠施設としての機能だけでなく食糧を含む生活物資や各種機動兵器、艦船の生産、保管設備を備えている。軍事拠点として理想的と言って良いだろう。そなたがいるマリנקレイドル一号には既に一通りの機動兵器とそれを運用するための母艦が用意してある。後で確認するが良い。さて、ではこの世界でのそなたの役目についての最初のヒントを与えよう。今日はC・E・55年1月1日だ。5月までに準備を整えておく事だ。ではさらばだ」

そこで映像は終わった。C・E・55年？5月までに準備？どういう事だ？

この時僕はこの年の5月に何があるのか思い出せなかった。

答えと初期設定と食事（改）（前書き）

主人公のステータス修正しました。

答えと初期設定と食事（改）

前回の答え「C・E・55年5/18はキラ・ヤマト、カガリ・ユラ・アスハの誕生日です。そしてそれから数日の内にブルーコスモスのテロでキラ達の両親のヒビキ博士夫妻は死んでしまうのです。キラとカガリが助かったのは母親のヴィア・ヒビキが妹夫婦であるヤマト夫妻に託してメンデルから脱出させたからである。（しかしその後もスーパーコーディネーターの成功体であるキラはブルーコスモスの重要ターゲットとされている）

「つまりこの出来事に介入しろということですねわかります」

「御主人誰に言ってるですニヤ？」

「気にしないで。僕は気にしない」

しかしどうしろってのさ？これから先の事がある程度判るとはいえ僕自身はただのオタクでしかない。テロリスト相手にドンパチやるなんて無理に決まってる。

「考えている所すいませんけど御主人、まずやってもらう事がありますニヤ」そう言ってワトソンが黒いPSPそっくりな形の端末を差し出してきた。

ワトソンによると今の僕は名前から誕生日、血液型などの基本的な設定がブランク（空白）状態で、それらの初期設定をこの端末で行うらしい。操作はやっぱりPSPと同じ感覚で、設定画面はスパロボの主人公設定画面ほばまんま。さて名前はどうしようか。考えた挙げ句こうなりました。

名前：セイル・ウインドライド

我ながらセンスいまいちだけど、他に思いつかなかった。仕方無い。さて、決定、と。ところでこの端末、クレイドル情報、兵器情報、といった項目があるのだが、一つ気になる項目がある。キャラクター選択という項目だ。キャラクター設定でも無く選択。試しにカーソルを合わせてボタンを押すと、やはりスパロボのキャラクター辞

典のような名前のリストが出てきた。更にカーソルをアクセル・アルマーに合わせてボタンを押すと全身が一瞬光り……

「一体どういうことだ？」

僕自身の姿がアクセル・アルマーそのものになっていた。と、視界の隅に笑いをこらえているオモチとこちらに背を向けているワトソンの姿が。何故かオモチにもやつとした感情が湧いたので首根っこ掴んで持ち上げる。

「おい白猫、どういう事が説明しろ」

「ニヤニヤ！？御主人、何か怖いニヤ、さつきボクたちを撫でてくれた御主人はどこ行ったニヤ！？」

「どうも姿が変わったせいか姿や声だけでなく性格や口調も本人に近いものになるらしい、これがな。さあ早く説明しろ。さもなくば・
・縛り上げてマタタビを目の前に置いたまま放置する」

「ニヤ！？御主人ドSだニヤ！！」

「さあ、大人しく説明した方がお前の為だぞ？」

「ニヤー！わかりましたニヤ話しますニヤー！」

オモチの説明によるとキャラクター選択で選択した人物に変身出来るらしい。それも容姿や声だけで無く性格や知識、知能もコピーされるらしい。うん、間違ってもテンザン・ナカジマとかジーベル・ミステルとかは選択しないようにしよう。あんな奴らの性格なんかコピーしたくない。

でもこれ便利だな。ピアン博士になればその頭脳やカリスマで色々出来そうだし。これは良いな、うん。

さて、これからどうするか・・・グゥ　く・・・。

「腹減ったな」

「時間的にも夕食時ですニヤ。丁度いいから食堂にご案内しますニヤ」

というわけでまたワトソンとオモチの案内で食堂に移動する。

食堂は広い造りで、机と椅子は木製品を置いてある。クレイドル内には今は稼動していないがもう一つ同じ規模の食堂があるという。

席につくとオモチが

「それじゃ御主人待っててくださいニヤ」

といって厨房に向かつて早足で歩いて行く。少しして、ニヤ、ニヤツニヤ、という声が聞こえた。

それからすぐに前菜としてサラダとスープを載せたトレイを、コックコートのアイルーが運んで来たので、「ありがとう」と言って頭を撫でると嬉しそうな顔をして厨房に戻っていった。気がつくともちとワトソンが棘のある視線をこちらに向けていた。

「御主人、アイルーに愛想振りまくのは時と場合を考えて欲しいニヤ」

「え？何で？」

「端末で自分のステータス確認するニヤ」

言われるままに端末を操作しステータス確認を選択する。

「格闘110 射撃115 命中105 回避120 防御125 技量100か、当然だが低めだな」

「そこじゃニヤくて特殊技能の方だニヤ」

特殊技能？あ、あった・・・何これ？

「ネコのカリスマ？」

「御主人はアイルーを含む全ての猫に懐かれるスキルが常時発動しているニヤ」

それは猫好きにはたまらんスキルだ。でも戦闘に役立てらんねえ。そんな話をしながらサラダを食べていると、ステーキが運ばれてきたので会話終了。ステーキを美味しく頂くのだった。

そのステーキが何の肉か聞いて驚くのは翌日の朝の事である。

介入準備開始（前編）（前書き）

一度削除しましたが一部修正の上再投稿致します。

介入準備開始（前編）

「うわあ・・・」

今僕の目の前にはファンタジーというかメルヘンチックな光景が広がっている。

今居る場所はクレイドルの生産プラントの一部、牧畜エリアである。そこでは牛や豚、羊や鶏などが飼育されているのだが、僕の目前にいるのはそれらの動物達と比べると異質と言って良いだろう。僕の目の前で草を食べているのはアプトノス。モンスターハンターシリーズに登場する草食の竜種である。実は昨日の夕食のステーキはこのアプトノスの肉だったのだ。

確かにアプトノスの肉は美味であるとWikipediaで見た記憶があるし、ライトノベルでアプトノスのステーキがご馳走だと描写されていた事があるが、まさか実際に食べる事になるとは思わなかった。美味かったけど。

しかもアプトノスだけでなく柵で囲われている所にはガーグアやケルビもいるし、この隣にある気温設定の違うエリアではポポとガウシカを飼育している。つまりポポタンやホワイトレバー、ガーグアの卵といった珍味も食べられるという事か。凄くないかそれ？ と思ったら、ホワイトレバーは保存がきかないので食べる時はその都度ケルビかガウシカを絞めてさばかなければならぬらしい。

「にしても・・・」

やはりこれはファンタジーの世界だろう。現実には存在しない筈の動物達、そしてそれを飼育しているのはアイルーなのだから。

牧畜エリアを一通り見て回った後、休憩中のアイルー達と戯れてから、今度は各種機動兵器の格納庫に向かう。そこにはOGシリーズに登場するPT、AM、特機が並んでいた。さすがに魔装機神や超人、グランゾンやエクサランスは無かったが、最新機種である量産型ゲシュペンストMK-？改がある。そして格納庫の隅に、装甲

の外された量産型ゲシユペンストMk-?と量産型ヒュツケバインMk-?があつた。

「あの装甲の無いゲシユペンストとヒュツケバインは？」疑問に思つた僕の質問にはワトソンが答える。

「あれは御主人の勉強用の教材ですニヤ」

「教材？」「御主人はPTやAM、特機に乗つて介入するニヤ。なら自分が乗る兵器の事を良く知らないといけニヤいニヤ。そのため
の教材ですニヤ」

「成る程、その通りだ」

僕も車やバイクの整備を少しばかり勉強した事があるからわかる。自分に合わせてマシンを弄るにしても自分に合ったマシンを選ぶにしてもまずマシンの事を理解しなければならぬ。

そうでなければマシンの性能を引き出す事は出来ないし、下手をすれば死ぬ事すら有り得る。だからプロのレーサーはメカニクとの関係に氣を使うし、マシンの特性を理解する為の努力を惜しまない。まあ極一部の例外もいるが。

そうする事が速く走るため、勝利する為に絶対に必要だと知つてゐるから。そしてそれはPTのような兵器にしても同じ事。ジェネレーター動力源の最大出力や最大稼動時間、最大積載量、フレームの耐久性、関節部の可動域、どこまで繊細に操作出来るか、それらを詳細に把握した上で自身の技術を磨き抜いたその果てが特殊戦技教導隊のような凄腕と呼ばれるパイロット達の領域なのだろう。

そこまで到達出来るとは思えないが、それでも出来る事はやつておいた方がよい。何せ戦場で賭けるチップは自分の命なのだから。

「もちろんそれだけやってれば良いってわけじゃないよね」

「もちろんですニヤ。こっちの方ですニヤ」そう言つて歩き出したワトソンについて行く。そしてその先にあつたのは…。

「トレーニングルームか。まあ予想の範囲内だね」

「ちよつと待つててくださいニヤ。オモチ、手伝つてニヤ」

「OKニヤ」

オモチに肩車してもらう格好でワトソンが壁に掛かっているバイザー付きのヘッドギアを取ると、オモチの肩から降りてこちらに二匹で戻って来る。言えば自分で取るのに、と思いながらも、そんな二匹が微笑ましい。

「御主人？」

「ああ、ごめん。それで、これをどうするの？頭に着けるんだろうけど」

ワトソンからヘッドギアを受け取りどう使うのか尋ねる。

「口で説明するより実際に体験した方が早いですニヤ。まずは頭に着けてくださいニヤ」

言われた通りヘッドギアを着けると、いつの間にか、オモチが壁際に移動していてこれまたいつの間にか用意していた椅子を足場にして壁のパネルを操作していた。

「それじゃ御主人、始めますニヤ、スタート！！」

オモチがパネルのボタンを押すと、目の前に短く切りそろえた金髪に碧眼の青年が現れた。着衣は剣道の胴着に、右手に木刀を持っている。「ブルックリン…ラックフィールド…」

そう、僕の前にはATXチームの一員、ブルックリン・ラックフィールド（通称ブリット）が立っている。そして木刀を両手で握り、その手を右耳の位置まで上げる。ってその構えは！？

「チェストオオツ！！」次の瞬間、目の前で火花が弾け、僕は頭に衝撃を受けて仰向けに倒れた。

「「ごめんニヤさい」」

横になっている僕にオモチとワトソンが土下座して謝る。アイルーって土下座できたんだ。そしてその後ろに灰虎のアイルー、トレーニングルームの担当アイルー（名前はダイゴと言っ）が腕組みして立っている。どうやら怒っているらしい。

「えっと、どう言う事かな？」

「実は……」

ワトソンとオモチの説明によると、先のヘッドギアは対人戦闘の訓練用デバイスで、現れたブリットもバイザーに写された立体映像だった。僕が感じた痛みと衝撃はヘッドギアから脳に送り込まれたイメージによるものだ。

「つまりバキがやってるリアルシャドーを機械的に再現したって訳か」（範馬刃牙知らない人に分かり難い例えでごめんなさい）

「それですニヤ、その…設定を間違えてしまったのですニヤ」

オモチがバツの悪そうに言うത്それまで黙っていたダイゴが不機嫌そうに口を開く。

「そもそもこの設備の使用は僕の監督下でやる事になってたニヤ。それを…なまじ使い方を知っているからって、勝手な事されたら困るニヤ！」

「ニヤ…ごめんニヤさい！」

「反省してるニヤ…」

「御主人は初めてニヤんだから、標準よりレベル落として始めればこうはならなかったのニヤ。それも僕の仕事だったのに…ぶつぶつ…」

つまり突然脳に送り込まれた打撃のイメージが僕の耐えられるレベルを越えていたらしい。

「分かっているかニヤ！？下手すりゃ御主人の脳に障害が出たかもしれないニヤいのニヤ！それだけこのシステムは扱いに注意が必要なのニヤ…！」

「ごめんニヤさいごめんニヤさい」

「もうしませんニヤ…」

「僕に謝ってどうすんだニヤ！」

「御主人ごめんニヤさい！」

「お詫びはニヤんでもします…！！」

あゝ、もうオモチもワトソンも泣き出しちゃってるよ。これ以上は流石に…。

「もう良いよ二人とも、ダイゴももう言う事言っただでしょ？」

「むゝ、御主人が良いニヤら…でも本当に危ニヤかったのニヤ」

「僕も気をつけるから、ね？。オモチもワトソンも、今回は無事に済んだわけだしこれから気をつけてくれれば良いから」

「御主人…」

「まだ説明終わってないでしょ？今後の計画について説明頼むよ」

「わ、わかりましたニヤ！」

「それじゃ一度コントロールルームに行きますニヤ！」

そう言って駆け出すオモチとワトソンのしっぽはピンと立っている。立ち直り早いなあ、と思いながら、ダイゴに一言言ってからオモチとワトソンの後を追うのだった。

介入準備開始（前編）（後書き）

後編も本日中に投稿します。

介入準備開始（後編）（前書き）

再投稿です。因みに作者は猫（犬も）大好きです。

介入準備開始（後編）

コントロールルームに着くと、早速正面モニターを使って5月18日までのスケジュール説明が始まる。

「今日は1月2日で明日から訓練開始とすると、5月18日まで4ヶ月半しかニヤいですニヤ。ニヤので明日からは週1日休みで無理でニヤい範囲で訓練を進めるニヤ」

「それってキツくない？」

「少しキツイ位でも間に合うか怪しい所ですニヤ。」

「一年あればもつと確実にしたけどニヤ」

確かに時間が少ない。5月に戦う事になるのはブルーコスモスのテロリスト達。どんな手段を使うかわからない。出来るだけの事はしておかないと、介入しても僕が死ぬだけって事になるかもしれない。「それでこれが一週間の訓練スケジュールの内訳ですニヤ」

モニターにスケジュールが表示される。日中は90分訓練10分休憩の繰り返しで、夕食後は2時間の訓練と、みっちり入っている。間に休憩が入っている辺り無理じゃなさそうに思えるが実際はかなりしんどいだろう。しかしやらないという選択肢は無い。

「やるしか無い、か」

そして翌日、つまり1月3日から訓練が始まった。以下ダイジェスト形式でお送りします。

1月3日

ランニング

セイル（以下セ）「ハア…ハア…ヒイ…ヒイ…」

ダイゴ（以下ダ）「御主人！顎上げちゃ駄目ニヤ！体をふらつかせたら余計に体力消耗するニヤ！」

セ「ハア…ハア…（そんなこと言われても…）」

筋力トレーニング

ダ「もつとゆつくりニヤ！筋肉を意識して上げるニヤ！」
セ「フウ…フウ…クッ…」
ダ「ハイあと30回ですニヤ！」

1月4日

対人戦闘訓練（近接格闘）

ズダーンッ！！

カイ「足下が好きだらけだ！上体から下半身の動きを予測しろ！！」

セ「…っ痛うっ…」

ブリット「そこっ！」

バシッ！

セ「っだあっ！」

ブ「隙だらけですよ」

セ「くう…」

座学（T C ・ O S とモーションパターン）

学習用ボイスマニュアル（以下V M）「タクティカル・サイバネイクス・オペレーティング・システムは、パイロットのコマンド入力に対し、人工知能が周囲の状況を瞬時に分析して入力されたコマンドを処理するための最適な機体モーションを実行するシステムです。この場合の周囲の状況とは、目標の位置や距離、自機の姿勢などのことであり……」

セ「むむむ…」

V M「つまり【現在の自機の状況】から【入力されたコマンドの実行】の間のモーションを、機体に設定された複数のモーションパターンの中から最適と考えられるものを人工知能が判断、実行してくれる訳です」

セ「ふゝむ…」

V M「モーションパターンデータの種類や優先順位はパイロットが

任意に設定できるので、パイロット自信の好みや操縦のクセに合わせ機体の動きを最適化する事ができる自由度の高いシステムとなっています」

セ「……（理解しようと必死）」

P Tシミュレータ訓練 （量産型ゲシュペンストMk-?で同機種対戦）

セ「クツ！動きが早くで照準が……」

エクセレン「だからって足を止めちゃ、駄目駄目よん」

ズガガガガ（マシンガンで蜂の巣にされる音）

セ「ギャー！ーッ！！」

1月5日

P Tの構造学習（実技）

セ「えーつと、ジェネレータからこう出力して…このケーブルがこつちで…（バチッ）おうわっ！」

こんな感じで6日間、そして休日。

1月9日

セ「はゝ、和むゝ」

ナデナデ、もふもふ。

オモチ「フニヤゝ、気持ちいいですニヤゝ（ゴロゴロ）」

ワトソン「御主人ゝ、ニヤゝそこいいニヤゝ（スリスリ）」

（注：撫でたりもふもふしてるだけです。念の為）

「ニヤ！オモチとワトソンだけズルいのニヤ！僕たちも御主人に撫でて欲しいニヤ！」

「ニヤー！」

「ニヤー！」

「ニヤニヤー！」

セ「うおお！？これはまさにぬこハーレム！至福だゝ！」

とまあ、こんな調子で、訓練6日休み1日のペースで4ヶ月過ぎて、5月、いよいよ本格的に介入の準備としてL4宙域へ向かう為の艦

(トライロバイト級)に食糧や資材、装備の積み込みを行い、5月10日、マリンクレイドルを出発して宇宙へ向かった。

地球の軍事レーダーや衛星？ASRS使って反応消して通過しました。凄いねこれ。

介入準備開始（後編）（後書き）

さて、次こそ介入開始、できるといいなあ…。

2万アクセス突破記念、主人公&登場兵器設定（前書き）

おかげ様で2万アクセス突破です。ありがとうございます！
主人公の設定とムーシクレイドル、そして今後登場する兵器の設定
紹介です。

2万アクセス突破記念 / 主人公&登場兵器設定

主人公

セイル・ウィンドライド

とある天使の悪戯のせいで死亡して神によってコズミック・イラの世界に転送された青年。転送後の容姿は中肉中背、顔は整っているが特別美男子という程でもない。見ようによってはハンサムに見えるという程度（銀河英雄伝説のヤン・ウェンリーが外見的イメージとして近い）

基本的に温和な性格で人の話は落ち着いてよく聴くが、嫌いな人間には辛辣な物言いをする。命を奪う事に関しては人間の業として背負う覚悟を持つが、可能な限り殺しは避けたいとも思っている。そのため、命を奪う事に覚悟の無い者や無自覚な者、殺戮を愉悦とする者は大嫌い。持論は「命の価値は平等。だけどそれに優先順位をつけなければいけない事もある。ただしそれは最後の手段であるべき」

犬や猫が大好きで、周りにアイルーが大勢いるクレイドルはかなり居心地が良いらしい。

ステータスは初期値は高くないが伸びしろは大きい。やや格闘寄り。

マリククレイドル

神がセイルの拠点として用意した施設。スパロボOGのアイスクレイドル、ムーンクレイドルと同様の人工冬眠施設だが、軍事拠点としての運用を重視して神によって食糧生産設備や兵器の生産設備等が魔改造されている。地球上に3つ建造されており、それぞれにスペースノア級汎用戦闘母艦を一隻ずつ保有している。セイルのいるクレイドル一号にはシロガネがあるが、しばらくは使われる予定無し。

トライロバイト

OG世界でシャドウミラーが使用していた戦艦。宇宙、空中、水中で運用でき、スペースノア級と比べると搭載能力とステルス性に優れ、戦闘力でやや劣る。序盤では戦闘力より隠密性が重要なのでこちらが使われる予定。

ゲシュペンスト・タイプS

OG世界で最初に造られたパーソナルトルーパー、ゲシュペンストの二号機。OG世界では搭載された新型プラズマジエネレータの事故でパイロット諸共行方不明になり、エアロゲイターによって回収、スフィールドクリスタルを移植されてL5戦役に投入された後撃破されているが、この機体は後継機のゲシュペンストMk-?タイプSを参考に改修されてジエネレータ出力を安定させている。

武装：プラズマカッター

左腕のラックに三本装備。通常の物より高出力。

プラズマスライサー

右前腕に内蔵。プラズマを纏った手刀で標的を切り裂く。

ブラスタークヤノン

胸部に内蔵の高出力ビーム。威力はMk-?タイプSのメガブラスタークヤノンと同等。

究極ゲシュペンストキック

ゲシュペンストMk-?タイプSの使用する物と同じ。機体の改良によって使用可能になった。

その他換装武器使用可能。

2万アクセス突破記念 主人公&登場兵器設定（後書き）

本編の続きは現在執筆中です。しばらくお待ちください。

パンドラの箱〜コロニーメンデル〜（前書き）

今回も介入出来なかった…。

今回から独自解釈に基づくオリジナル設定が含まれます。

パンドラの箱〜コロニーメンデル

5月17日。現在トライロバイトはL4宙域の外れのデブリ帯の中でステルス機能を使用して見つからないようにしている。

明日、キラ・ヒビキ、カガリ・ヒビキの2人が誕生する。それから数日後にテロが起こり、ヒビキ夫妻が死ぬ。現在僕が知っている事はこれだけ。あ、それと、この時期にはギルバート・デュランダルもメンデルで研究員として所属しているんだった。この頃からデステニープランを考えているのだから、恐ろしい。今もメンデルにいるかはわからないが、数日後のテロで死んでくれれば後々面倒が無くていいなあ、などと物騒な考えが浮かんでしまうのは、原作を知る者としては仕方ないんじゃないだろうか？それにしても情報が少ない。下手に介入すると余計に状況が悪化するかもしれない。キラとカガリはテロの前にヤマト夫妻に連れられてメンデルを脱出するとわかっていいるからその辺には触れないようにしたい。その上で2人の実母であるヴィア・ヒビキは助けたい。夫のユーレン・ヒビキはもうマッドサイエンティストに墜ちているから正直助ける気になれない。逆に生かしておくとかすかわからない怖さがある。だかヴィア・ヒビキはまだわからない。もしかしたらユーレン程墜ちてないかもしれない。彼女も遺伝子操作研究に手を染めているから命を弄んだと言えそうなのだろうが、自分の子を夫の研究に利用された事で目が覚めているかもしれない。そう期待したい気持ちがあり、それが間違いでないか確かめたいという思いが湧いてくる。

「御主人、デイビッドが戻ってきたニヤ」

思考の海に沈んだ意識はワトソンの言葉で現実に帰還する。

「あ、ああ、じゃあここ（格納庫）まで来てもらって」

「もう来てるニヤ、ボス」

と、高音だが、微妙に洪みのある声が耳に入る。辺りを見回すと…

あつた。ダンボール箱。

次の瞬間、ダンボール箱を跳ね上げて、中から、額にバンダナ、身体にはグレーのスニーカー、背中にはその身体に比して大きく見えるコンバットナイフを背負ったアメシヨのアイルーが現れ、ビシツと背筋を伸ばして敬礼した。

「ボス！只今帰還致しましたニヤ！」

このアイルーがデイビッド、潜入と情報収集、工作活動を専門とする4匹のアイルーの一匹である。12時間程前に4匹全てメンデルに情報収集に向かわせたのだが、一匹だけで戻ってきたのはどうした事だろう？

「ハンゾー達は？」

「ハンゾー兄貴は引き続きメンデル内部の情報収集、ジライヤはヒビキ博士の人工子宮の監視、サスケはヴィア・ヒビキの監視についていますニヤ。自分は現時点の情報をボスに届けるために戻りましたニヤ」

と、デイビッドは背筋を伸ばして直立不動の姿勢で僕に報告する。

ハンゾーというのはデイビッドを含む潜入、工作活動を専門とする4匹のアイルーのリーダーで、デイビッドとは義兄弟の契りを結んだ仲らしい。ナルガネコシリーズを装備した黒毛のアイルーだ。サスケとジライヤはハンゾーの弟子で、ハンゾーに習ってナルガネコシリーズを装備した自称忍者アイルーである。

ちなみにサスケは灰トラ、ジライヤは群青色の毛色で、僕の事はお頭、ハンゾーの事は師匠、デイビッドの事は兄者と呼ぶ。本当に忍者になりきっているようだ。

「ふむ、それぞれ必要な事をやってくれてるみたいだね。それじゃ成果を見せてもらおうか」

「了解ニヤ。このディスクを再生するニヤ」

デイビッドが差し出したディスクをうけとると、格納庫の脇のコンピュータのドライブにセットしてファイルを開く。その中に入っていたのはメンデル内部の構造データと研究員のリスト、メンデルで

行われていた研究内容。

「これは凄いな…ん？」

ハンゾー達の手腕に関心しながらデータをチェックしていると、ある記録に目が止まった。それはヒビキ博士の人工子宮とそこから産み出されたスーパークーデイナー、その失敗作とされた者達の処遇についてだった。

そもそもヒビキ博士の人工子宮は遺伝子調整で子供を作る際の不確定要素を排除し、思い通りに子供を作り出す為の物だった。しかしスポンサーに対し分かり易くアピールして資金を引き出す為にその目的は最高のクーデイナーを作り出す事にシフトしていった。その過程で望んだ通りに生まれず、失敗作の烙印を押された子供達が存在した。彼らの内余りに能力が低かったり、偏った能力を示す者達は薬殺して隠蔽、能力が比較的高いが理想のレベルに届かない者達はクーラシア連合に資金援助と引き換えに売り払われていた。恐らくカナード・パルスもそんな子供達の1人だったのだろう。

「これが…これが人のする事か!？」

湧き上がる怒りを思わず声に出してしまう。

「人類の発展の為と!より良き未来の為と云って遺伝子改変技術を規制する国連の決定を無視してまで!やっている事は何だ!? 命の根幹たる遺伝子を弄び、己の都合で産み出した子供達を実験動物のように扱い、その挙げ句が能力で振り分けて殺すか売り飛ばすだ!?!? 何様のつもりだ!?!」

クーレン・ヒビキは自分の子供であるキラも実験に利用している。キラだけでは無い。カナードはキラとカガリの兄ではないかという説がある。その真偽はともかくとしてもキラ以前に実験台にされたヒビキ博士の子供がいたとしてもおかしくない。

「クーレン・ヒビキ!」許し難い男の名を口にする。

「そもそもラウ・ル・クルーゼもヒビキ博士とアル・ダ・フラガの工ゴで産み出された被害者じゃないか。レイ・ザ・バレルだって…世界の全てを憎むなんてのは流石に共感出来ないけど」

レイ・ザ・バレルに関してはデュランダルも一枚噛んでいそうだけど。

それに叢雲劾やグウド・ヴェイア、更にソキウスもこのメンデルで産み出された者達だ。コロニーメンデル、ここは遺伝子にまつわる様々な遺恨や災厄をの種を世界に撒き散らすパンドラの箱だ。希望は…確かにある。しかしそれすらも災厄の一部でしかないのだろう。

「御主人…作戦中止するニヤ？」ワトソンが、氣遣わしげな声で聞いてきた。

「いや、やるよ。このまま放つてはおけない」

ヴィア・ヒビキに生き延びてもらう理由が増えた。いつかキラやカナード達メンデルで産まれた子供達に当事者である彼女の口からその事について語ってもらおう。彼女にはその責任がある筈だ。一番責任があるのはユーレン・ヒビキだが、コイツがきちんと彼らと向き合って話をするようには思えない。ユーレンにとつてキラは自分の研究成果であり、カナード達はその過程で産まれた失敗作ではないのだから。ならせめてその妻であるヴィアに語ってもらうべきだろう。それが懺悔になるか自己弁護になるかはわからないけど。

「そのためにも絶対に死なせるわけにはいかない。デイビッド、もう一度メンデルに潜入して内部を探って。ブルーコスモスがいつ動くかわからないから連絡が取れるように通信機を持って行ってね」

「了解しましたニヤ！」

僕の指示を受けて走り出すデイビッドを見送りながら僕は自分が使う機体の準備に取りかかった。

パンドラの箱〜コロニーメンデル〜（後書き）

次回はメンデル内部。ヴィア・ヒビキとその妹であるカリダ・ヤマ
トの会話が中心になる予定です。

母として、科学者として（前書き）

三人称形式は難しいです。ヴィア・ヒビキやヤマト夫妻の性格や口調は原作の描写が少ないため独自解釈です。ユーレン・ヒビキの人物像も同じく。

それと、ASTRAYシリーズのキャラ、カナード・パルスは本作ではキラとカガリの兄としています。

母として、科学者として

5月18日、ついにキラとカガリが誕生した。デイビッドの口から伝えられたサスケとジライヤの報告によるとキラの方が先だったようだ。原作でカガリは自分の方が姉だと言い張っていたがやはりというかなんというか、キラの方が兄だったわけだ。

「ここからが勝負所かな？」

これから数日の間にブルーコスモスがテロを起こすまで、こちらはメンデル内部の動向を警戒しなければならない。

メンデルに出入りする船舶は全て調べるようにハンゾー達に伝えてあるが、いつテロが実行されるかわからないため、今日から格納庫で行動を起こす時を待つ事にして、格納庫の隅に仮眠用のスペースを作り、そこに設置した折り畳み式の簡易ベッドにシュラフをマジックテープで固定すると、アラームを三時間後にセットしてシュラフの中に潜り込み、仮眠に入った。

（視点変更）

コロニーメンデル、そこは遺伝子研究のメッカとも、禁断の聖域とも呼ばれている。ここにはコーディネーターの作成を一大産業とする企業、G・A・R・M・R&D社の研究所施設がある。その研究施設の中の病室のベッドに1人の女性が身を預けている。彼女の名はヴィア・ヒビキ。この研究施設の主任研究員、ユーレン・ヒビキの妻であり、彼の造った人工子宮によるスーパージョーディネーターの成功体、キラの母親である。彼女は来客を待っていた。メンデルに到着した事は既に伝わっているから、程なく此处に来る筈だ。

数分か、それとも数十分待ったろうか、来客を告げる電子音が鳴り、ヴィアの意識をそちらに向けさせる。手元のリモコンでロックを解除すると扉が開き、1人の女性とそれに付き添うように1人の男性

が入って来た。扉の前にはスーツを着た男が2人立っているのが見えた。

女性はヴィアのベッドに近づくと声をかけた。「久しぶり、姉さん」と。

彼女の名はカリダ・ヤマト。ヴィアの妹であり、付き添いの男性は彼女の夫のハルマ・ヤマト。2人は大事な話があるからメンデルまで来て欲しいというヴィアの頼みを受けてオーブから此処に来ていた。扉の前にいた男達はカリダが此処に来る為の手配を依頼した人物がよこしたヤマト夫妻の護衛だろう。ユーレンと結婚してメンデルに移ってから疎遠だった自分の頼みを聞いてくれたかの人に感謝しながら、久方ぶりの妹との挨拶代わりの会話の後、本題を切り出した。

「話というのは私の子供達、キラとカガリの事なの」

ヴィアは一旦言葉を切るとカリダとハルマに座るよう促し、2人はそれに応じて椅子に腰掛ける。

「単刀直入に言うわ。この子達をここから連れ出して欲しいの。この子達はここにいてはいけないの」

「どういう事なの姉さん？お兄さんはこの事知っているの？」

カリダは疑問を投げかける。ヴィアの子供達の事ならば、夫であるユーレンの意志も重要な筈である。しかしヴィアの答えは否であった。

「あの人に知られるわけにはいかないの。あの人にはこの子達に愛情なんて無いのよそうでなければあんな…」

ヴィアの肩が怒りに震える。キラより一年程前、スーパーコーディネーターの実験体として産み出されたヴィアとユーレンの子供は、失敗作と見なすや否やユーラシア連邦に実験台として売られてしまった。

その事を知らされていなかったヴィアはユーレンを責めたがユーレンは聞く耳を持たなかった。もはや自らの功名心に取り憑かれていたのだ。

「私もここで遺伝子研究に携わってきたわ。でも自分の血を分けた子供がモルモットのように売られてしまつて目が覚めた…生命は産まれてくるものであつて、作り出すものではない。そんな当たり前の事が見えなくなつていたの…このままここにいたらキラはあの人の研究成果として晒し者にされる。そうなればこの子を狙う人達が必ず出てくる。それにカガリにだつてここにいっても良い影響は無いわ。何より、私とユーレンの子供である事がこの子たちの災いの種になるかもしれない…。お願いカリダ、ハルマさん！勝手な頼みだつてわかつているけど、この子達には、何の罪も無いこの子達には幸せに生きて欲しいの。私達の罪を背負わせたくは無いの！」

それはヴィアの心からの叫びだつた。
まっとうな人間であれば我が子の幸福を願うのは自然な感情だろう。今ヴィアは科学者としてよりも母としての感情が働いていた。カリダは姉の真剣さに引き受けても良い氣になつたが、事が事だけに即答はできず、少し考えさせて欲しいと答え、ヴィアも了承した。しかしその数日後。

研究所内の電源が非常電源に切り替わる。研究所内が喧騒に満ちる。ヴィアの部屋にカリダがハルマと護衛の男達を連れて駆けつけた。
「姉さん！ブルーコスモスよ！銃を持っているわ！…早く逃げないと…！」

「私は良いから子供達を…！」逃げるよう呼び掛けるカリダにヴィアはキラとカガリのベッドを指して2人を連れて行くように促す。

「姉さんも一緒に！ここにいたら殺されてしまうわ…！」

殺されるとわかつて姉を置いて行くなどカリダにできるはずも無い。しかしヴィアは諭すようにカリダに語りかける。

「カリダ、理由はどうあれ私は生命を弄ぶ側の人間だつたの。ここで私が殺されるのならそれは私の罪に対する罰なの。それに私は足手まといになるだけよ。だからこの子達を、キラとカガリを連れて行つて。私の最後のお願い」

「最後なんてそんな！」

「カリダ」

尚も拒絶するカリダの肩を掴み、ハルマが声を掛ける。

「義姉さんの言う通りにしよう。この子達を守ってあげるのが、義姉さんの覚悟に応える一番の方法だよ」

「あなた……」

「ありがとうハルマさん。カリダ、早く子供達を」

「……わかったわ。姉さん。」

カリダはベッドからキラカガリを抱き上げる。2人ともむずがるが
あやす時間すら今は惜しい。

「子供達をお願いね、カリダ、ハルマさん」

ヴィアは穏やかな笑みを浮かべて言った。

「うん……さよなら、姉さん」

カリダはキラとカガリを抱きかかえるとハルマと護衛の男達とともに部屋を出て行った。

それから数分後、短機関銃を手にした男が2人部屋に乗り込んで来るとヴィアに銃を向けた。

「ヴィア・ヒビキだな。お前たちが作った化け物はどうした!？」

ヴィアは男達に毅然と言い放った。

「化け物ですって? そんな物ここにはいないわ。あの子は私の子よ。化け物なんかじゃ無い!」

しかしそんなヴィアを冷笑する。

「戯言を。遺伝子を改造し、あのような鉄の子宮から生まれたモノが化け物でなくて何だと言うのだ? 人の皮を被った化け物共を作り出した罪、死をもって贖え。青き清浄なる世界の為に!」

男達の指がトリガーにかかる。ヴィアが瞳を閉じたその時。

「ふっざけんなああ!」

怒声とともに足音。更に何かがぶつかり合う音がした。

ヴィアが目を開くと、先程まで自分に銃を向けていた男達は銃を落として腕を押さえており、男達と自分の間に、鉄の木刀を構えた青年が立っていた。

母として、科学者として（後書き）

今回のラストに現れた青年（まあ誰かはすぐわかりますよね）の持っている鉄の木刀、新仮面ライダーSPIRITSの旧1号、2号編に登場したショッカーライダーの1人が持っていたものをイメージしています。しかし鉄製なのに木刀とはこれいかについて感じですね。

メンデル進入、そしてある男の最期（前書き）

ヴィアの所に辿り着くまでのセイルの動向その1。気力が続かなかったので途中までで一旦きります。

メンデル進入、そしてある男の最期

待機に入ってから、三時間仮眠しては三時間の筋トレとシミュレタ訓練、そして一時間コクピット待機してまた仮眠、と言う生活を送っている。食事が携帯食料ばかりなのがとても味気ないが贅沢は言えない。そんな日が続いて数日後、デイビッドから連絡が来た。テロリストの数は10人、武装は短機関銃及と拳銃。清掃業者や宅配業者に偽装して既にメンデルに潜入しているらしい。

「計画実行は明日ですニヤ。ボスもそろそろ出た方が良いニヤ」

「わかった。準備は出来ている。すぐに出る」

そう言って通信を切るとコクピットに入りハッチを閉鎖する。ヘルメットを被ると僕の乗機ゲシユペンスト・タイプSを移動させ、カタパルトに接続するとブリッジから通信が入る。

「ご主人、くれぐれも気をつけてニヤ」

「ああ、念の為メデイカルルームの準備をしておいてね」

「了解ですニヤ！」

「よし、ゲシユペンスト・タイプS、発進する！」

カタパルトから射出され、身体にGがかかる。メンデルに向けて進行方向を合わせるとスラスターを噴かし、同時にASRSを展開。メンデルに向かって進んで行く。

ASRSの限界時間420秒まで残り40秒を切ったところでメンデルを視認、スラスターの出力を下げながら近付き、距離100mを切ったところでスラスターを停止。慣性に任せて接近し外壁に取り付く。

「ステルスシート、オープン」

コマンドの入力におうじて背部のコンテナ4つの内の1つが開き、中からグレーのシートが広げられる。コクピットから出るとシートの端に取り付き機体を覆い隠すようにコロニーの外壁に端の部分を貼り付ける。それが済むとコクピットに戻りパネルを操作する。す

るとシートの色が変化し、コロニーの外壁と同色に擬態した。

「これでよし、と」

一息ついたところでデイビッドから通信。テロリストが予定を前倒して行動を開始したと言う連絡だった。コクピットの隅にかけていた竹刀袋から鉄製の木刀を取り出す。アイルー達に手伝って貰って造った、木刀の形の鉄の塊だが僕が今使える武器はこれしか無い。銃やナイフのような殺傷力の高い物はまだ 人に向けるには抵抗があった。

木刀を腰のベルトに挿すと射出式ワイヤーを使ってゲートに移動する。端末からハッキングしてゲートを開けると内部に進入する。内部を進む間にもデイビッドから連絡が入る。テロリスト達はブルーコスモスのお決まりの文句を叫びながら研究所内で出会った人間を片っ端から射殺しているらしい。地図を頼りに急いで研究所に向かう。

研究所内に辿り着いた。視界確保のためヘルメットのバイザーを上げて中に入る。少し進むと、錆びた鉄の匂いが鼻を突く。更に少し進むとそこにあつたのは白衣を着た人間の死体とその死体から流れてできた血だまりだった。

「うっ……」

その惨状と血の匂いにこみ上げる吐き気を抑えながら駆け足で先に進むと、人の声が聞こえた。近付いて行くと、通路の奥から銃声も聞こえる。通路の角からその先を覗くとそこには短機関銃を手に持ち、唇を歪めて引きつったような笑みを浮かべる2人の男と、今撃たれたのだらう、白衣を血に染めて床に崩れ落ちる男だった。銃を持った男達が引きつったような笑顔のまま声を上げる。

「はははっ！ やったぞ！ 多くの化け物共を作り出した悪魔の手先を、俺のこの手で！」

「大物はあと2人、コイツの妻と、コイツが最近作ったスーパーコ―ディネイターとかいう化け物のガキだ。そいつらを始末すれば、

俺達は英雄だな」

「当然だ！他の奴らに先を越される前に俺達がやるぞ！！」

その会話を聴いて、僕の中で何かが壊れた気がした。同時に頭の中で様々な感情が渦巻く。コイツ等はどうして笑っていられる？悪魔の手先？化け物？それに英雄だと？こんな事をしておいて何が英雄だ！

次の瞬間、僕は駆け出し、男達に向かって鉄の木刀を振り抜いていた。

それから数十秒くらいの間の事はよく覚えていない。気が付いたとき僕の手には血の付いた鉄の木刀、目の前には僕がやったのだろう、顔面は鼻が潰れて血がダラダラと流れ、腕はおかしな方向に曲がっている男が2人、さっきの英雄気取りのテロリストだ。どうやら怒りに我を忘れて手加減なしで叩きのめしたらしい。死んではいけないのがせめてもの救いか。

「う……」うめき声に振り向くとそこにいたのはさっき撃たれた白衣の男。まだ生きていたのか、ていうかコイツ…。

「アンタ、ユーレン・ヒビキか？」

そう、さっきのテロリスト達も言っていた。大物はコイツの妻と最近生まれたスーパーコーデイナーの子供だと。

「僕はアイツ等の仲間じゃ無い。わかるか？」

声を掛けながら傷を確認する。まだ生きていて意識もあるのが不思議なくらいの傷と出血だ。ユーレンが唇を震わせながら言葉を紡ぎ出す。

「わ…たし、の…けん、き…せいか…さい、こ、の…っ」

それがユーレン・ヒビキの最期の言葉だった。最期の瞬間に彼が思ったのは妻でも2人の子供でも無く、自身の研究成果だった…。やりきれない感情を抱きながら、僕はヴィア・ヒビキのいる病室へと駆け出すのだった。テロリストはまだ8人いる。全員を無力化しなければ犠牲は増えるしヴィア・ヒビキの命が危ないことは変わらないのだから。

メンデル進入、そしてある男の最期（後書き）

色々都合的かも…。次は猫忍者達を活躍させたい。

補足設定（前書き）

本編が煮詰まっているので代わりに投稿。こつこつのはスラスラ書けるのですが…。

補足設定

ステルスシート

電磁迷彩によって周囲の色と同色に変化し、その下にあるものを隠蔽する。スプリットミサイルやスラッシュリッパーのものと同形状のコンテナに詰めてゲシュペンストの背部ラックに積載出来る。マントのように機体を覆ったりして姿を隠す事が出来る。

セイルの装備

スパロボOGの連邦軍のパイロットスーツを改造した物。防弾、耐刃性能に優れ、マグナム弾でも貫通出来ないが衝撃はゼロには出来ず、マグナム弾を受けた場合、場所によっては骨にひびくくらいは入るといふ程度のもものライフル弾は口径によるが一般的なアサルトライフルの口径なら貫通はしない。武器は鉄の木刀。振りやすいように反りはあるがあくまで木刀の形をした鉄の塊である。真剣より重い。

アイルー 諜報部隊

そのまんま、諜報活動を得意とするアイルー達の部隊。

ハンゾーをリーダーにデイビッド、サスケ、ジライヤの四匹が実働要員。

ハンゾー

諜報部隊のリーダー。諜報のみならず戦闘においても部隊でトップの実力を持つ。装備はナルガSネコシリーズ。戦闘ではナルガネコ手裏剣、ブーメラン、タル爆弾の他 閃光玉や煙玉まで使いこなす。デイビッド

ハンゾーの義弟。通信機や隠しカメラ等の電子機器の扱いに長ける。戦闘においても斬り合いならばハンゾーと良い勝負が出来る。諜報部隊で唯一ソリッドネコシリーズを装備している。ダンボールに隠れることを好み、またその状態だと何故か（そこにダンボール箱があること事態不自然な状況でも）見つからない特殊なスキルを持つ。サスケ

ハンゾーの弟子、潜入と隠密行動はハンゾーも認めるが戦闘は苦手。専ら閃光玉や煙玉を使つてのサポートに徹する。

ジライヤ

ハンゾーの弟子。サスケと同じく潜入、隠密行動は一人前、戦闘はブーメラン専門。

カナード・パルスについて（自己解釈含むオリジナル設定）

ユーレン・ヒビキが人工子宮研究の為に妻ヴィアの子宮から取り出した受精卵から人工子宮に移されて産まれた、血縁的にはキラとカガリの実兄である。キラ、カガリと違い髪と瞳のどちらの色も両親と違う（キラはヴィアとカガリはユーレンと髪と瞳の色が同じ）のは人工子宮内で遺伝子に変化が生じた為で、実はこれが（思い通りの調整が出来なかったと言う意味で）失敗作扱いされた理由である。また、これはヒビキ博士達には感知し得ない事であったが、遺伝子調整の副作用で本能レベルでの闘争心が強くなっている。（育つ環境次第で自製の利く程度です）

補足設定（後書き）

次回はちゃんと本編を進めます。

救出、脱出、そして自省（前書き）

多分今までで一番長くなりました。あと今回あとがきにオマケ付けてみました。

ではどうぞお読み下さい。

救出、脱出、そして自省

遺伝子研究所内部でユーレン・ヒビキを看取ってその後。

「デイビッド！敵の位置は！？」

「次の分岐を左ですニャ！数は2！」

「了解！」

僕はデイビッドにテロリストのいる位置をナビゲートしてもらって向かっている。救出目標であるヴィア・ヒビキがテロリストの重要ターゲットである以上1人残らず無力化してしまわなければならないからだ。

デイビッドとハンゾーは研究所内のあちこちに小型センサーと隠しカメラを設置していてそれによって研究所内の人間の動向を把握している。

「ボス！敵がそちらに向かっていているニャ！このままだと鉢合わせだニャー！」

「ならば出会い頭にたたき伏せる！」

両手で木刀を握りながら走る。

そして曲がり角でテロリストが出てきた。すぐさま木刀を振るい短機関銃を持つ右手を打ち据える、骨を砕くつもりで。

「ぐあっ！」

「なっ！？」

二人組の動揺した隙を突いてさらにもう1人の腕に木刀を振り下ろし腕の骨を叩き折る。

「があっ！」

たまらず2人が落とした短機関銃を蹴り飛ばし、木刀を振り上げ…。

「ヤアアッ！！」

1方の左肩に打ち下ろす。バキッと骨が折れた感覚がはつきりと手に伝わった。

もう1人の方は狙いが逸れたが、鎖骨を砕いた。これで武器は使えない筈だし、仲間の手当ても出来ない。両腕とも使い物にならないのだから。

蹴り倒して地面に転ばせると痛みに悶えるテロリスト達を尻目に走り出す。惨いだって？骨折ならちゃんと治療を受ければいずれ治るのだからむしろ甘いくらいだろう。

テロリスト残り6人。

「ハア…ハア…フウ…」

デイビッドとハンゾーのナビゲートを受けて4人叩き伏せた。

「うっ…」

胸の奥から不快感がこみ上げる。疲労も重なって息苦しさが増し、たまらずヘルメットを脱ぐ。

「ふっ…あと、2人…か…」

「ぐ…貴様…」

ついさつき両腕を潰したテロリストの1人が呻く。痛みに顔を歪めながら僕を睨んでいる。

ああ、こういうのやつぱり精神的にキツイ。コイツらの考えも行動も僕には受け入れられないけど、それでも誰かに恨まれたり憎まれるのは良い気はしない。

「アンタ等には悪いけど、命を大切にしない奴は許せない性分なんだ」

一言だけ言い残して、また走り出す。

そつえば途中で何人かここから逃げ出す研究員を見たがデュランダルらしい者は見あたらなかった。既にここを離れていたのだろうか？

「ボス！残りの2人がサスケ達が監視している病室に向かっているニヤー！」

「マズいな…間に合うか？」

「万が一の時はサスケ達に足止めさせるニヤ」

「それは最後の手段ね。あの二匹は戦闘得意じゃないし。デイビッドとハンゾーもそっちに向かって！」

「了解ニヤ！」

そして僕も走り出した。

「ヴィア・ヒビキだな。お前達が作った化け物はどうした！？」

くそ、ちよつと遅かったか。部屋に辿り着く前に止めたかったのに。テロリストの残り最後の2人がベッドの上の女性、ヴィア・ヒビキに銃を向けているのを、僕は部屋の手前で息を殺して伺っている。これでは迂闊に動けない。何とか間に割り込めればヴィア・ヒビキを守ることは出来るのだが。二人組の間隔、不意を突ければ通り抜けて銃を叩き落とすくらい出来そうだ。

「化け物ですって？あの子は私の子よ。化け物なんかじゃ無い！」

ヴィアが毅然と言い放つ。やっぱりこの人はユーレンとは違った。

何としても助けたいと思う。しかしテロリスト達は嘲笑うように言い放つ。

「戯言を。遺伝子を改造し、あのような鉄の子宮から生まれた物が化け物でなくて何だと言うのだ？人の皮を被った化け物共を作り出した罪、死をもって償え！蒼き清浄なる世界の為に！！」

もう駄目だ。タイミング的にも僕の感情的にも今しかない！

「ふっざけんなああ！！」

部屋に踏み込みテロリスト達の間を駆け抜ける。すれ違いざまに木刀で左側の男の右手を打ち、振り返りざま右側の男の持つ銃を叩き落とす。

そのままテロリスト達とヴィア・ヒビキの間に立ち木刀を構え、啖呵を切る。

「お前らのような平気で命を踏みにじる奴らが！罪を償えだの蒼き

清浄なる世界の為だのと！寝言を言うな！！」

突然の乱入者に、ここにいる三人共戸惑っているようだ。

「あ、貴方は一体……？」

「貴方に危害を与えるつもりはありません。それだけ信じてください」

訝しむヴィア・ヒビキに害意の無い事を伝えながらテロリスト達を警戒する。咄嗟の事でさっきの打ち込みは甘かったし2人とも左手はノーダメージだからまだ無力化出来ていない。

「貴様、何者だ！？何故我々の邪魔をする！？」

テロリストの1人が痛み顔に顔をしかめながら怒鳴る。

「まず最初の質問……お前らに名乗る名は無い！……そしてもう一つの質問の答え……お前らのように命を踏みにじる者が俺の敵だからだ！！」

「ふざけるな！！その女は法に反してコーデイナーを生み出した！命を弄びそれによって利益を得ていたのだぞ！我々はそれを断罪するのだ！！」

そう叫ぶと男は懷から拳銃を抜きこちらに向ける。しまった！木刀で銃を叩き落とすより発砲する方が早い！何より僕が動けば後ろにいるヴィア・ヒビキが！！

「化け物を作る科学者もそれに味方する者も死ね！！今度こそ蒼き清浄なる世界の為に！！」

咄嗟に振り返りヴィア・ヒビキを庇う。発砲音と共に背中に銃弾が当たり、防弾仕様のスーツなので貫通はしないが鈍い痛みが襲う。通信機でこの部屋の近くにいるはずのアイルー達に指示を出す。

「閃光玉を！」

すぐにドアの方からテロリスト達の前に拳大の玉が投げ入れられ、強烈な閃光を放つ。僕は目を閉じながらヴィア・ヒビキの頭を胸に抱き込み光が彼女の目に入らないようにする。

「ぐあっ……！」

「目、目がああ……！」

閃光で視覚を封じられたテロリスト達が叫ぶ。

閃光が消えたと同時に身を翻し、木刀でテロリスト達の両腕を叩き潰す。

「ぎゃあっ！！」

「ぐあっ！！」

視覚を潰され、両腕を潰され、テロリスト達は床に倒れる。

「お、おのれ…！」

「くそお…殺せえっ！！」

テロリストの1人が自分を殺せと喚く。が、そんなの聞いてやる気は無い。

「嫌だね。お前らなんか、殺したくない。」

「な、何だと…？」

「命を奪うなら奪った命を背負っていかなきゃいけない。お前らの死は背負う気にもなれない、だから殺さない」

「貴様…」

「お前らだってこの人達を自分の勝手で殺したんだ。文句言う資格なんかあるわけ無いだろ」

まだテロリスト達は何か喚いているがもう相手してらんない。ヴィア・ヒビキに向き直って話しかける。

「ヴィア・ヒビキさんですね。ここは危険ですから、移動します。ちよつと失礼」

そう言うヴィアさんを抱きかかえ、部屋の外に連れ出す。

「あ、あの、夫が…」

「ユーレン・ヒビキ博士にはここに来る途中で会いました。その時既に手遅れでした…。すみません」

「！…そう、ですか…」

「ここにいてはまた命を狙われます。勝手ながら外へ運ばせてもらいます。…ハンゾー！デイビッド！サスケ！ジライヤ！出ておいで！」

僕が呼ぶとハンゾー達四匹が姿を現す。 「担架を」

「承知ですニヤ」

ハンゾー達は通気口から袋を引っ張り出すと取り出した中身を組み立てて担架を作り、四匹全員でそれを担ぐ。僕はその上にヴィアさんを寝かせた。

「揺れるかもしれませんが我慢してくださいね」

そう言う就先頭に立って警戒しつつ歩き始め、その後に担架を担いだハンゾー達がついてくる。

「アナタ達一体何なの？ 一体私をどこへ連れて行くつもり？」

「僕達の事は後でボスが説明しますニヤ。とにかくここより安全ニヤ所へ行きますニヤ」

不安げに尋ねるヴィアさんにデイビッドが受け答える。

そして僕達はメンデルのゲート近くから気密服を拝借してヴィアさんに着せる。

ハンゾー達もここに来るとき着てきたアイルー用の気密服を着てきた。

しかし出産後数日で体力が万全でないヴィアさんを連れてゲシュペンを隠してある外壁までいくのは少し難しい。ならば…。

「メインターム・アクセス、モード・アクティブ」

向こうから来てもらうまでだ。

「CALL・GESPENST!!」

端末から音声入力で信号を出して数秒後、ゲート近辺が僅かに揺れた。デイビッドがゲートを開くとその先にいたのは漆黒の巨人、ゲシュペンスト。左手に隠蔽に使っていたステルスシートを掴み、こちらを見下ろしている。怯えの混じった目でヴィアさんが尋ねてくる。

「あれは…？」

「…亡霊ですよ。本当なら存在しない筈の、ね。ハンゾー、ヴィアさんを後ろのコンテナへ」

僕の指示に従ってハンゾー達はヴィアさんの手を引いて泳ぐようにしてゲシュペンストの背部に回る。僕はコクピットに乗り込むとパネルを操作してコンテナの一つを操作する。「傷病者搬送コンテナ開放…ハンゾー、ヴィアさんと一緒に全員その中に入って」

少し間を置いてハンゾーから返事が返って来る。

「お頭、全員入りましたニヤ」

「よし、閉めるからコンテナのハッチから離れてなよ…コンテナ閉鎖、内部電源始動…コンテナリリース」

コンテナの内部電源を始動してコンテナをラックから外すとステルスシートで包んでゲシュペンストの両腕で抱える。

人が入っているコンテナをスラスターの近い背部ラックに懸架したままではどうも不安だからだ。気持ちの問題である。

「よし、帰ろう、僕達の艦に、A S R S 展開」

そしてトライロバイトへ機体を発進させた。

なんか…まだPTしか乗れないし何かあるかわからないからタイプSで来たけど、タイプR、いや量産型でも良かったような…。

用心すぎて準備が大袈裟になりがちなのが僕の悪い癖、か。一人生前からの悪癖を自省しつつ、トライロバイトに帰還するのだった。

救出、脱出、そして自省（後書き）

オマケ：ハンゾー達が気密服を着ているとき

今僕の目の前でハンゾー達が気密服を着ているのだが…

デイビッド「兄貴、気密確認はどうですニヤ？」

ハンゾー「ニヤ、問題ニヤしだニヤ。デイビッドの方をやってやるニヤ」

カチャカチャ（金具を留める音）

デイビッド「OKだニヤ、ありがとうニヤ兄貴」

サスケ「ニヤツ、ジライヤ、首回りから空気が漏れてるニヤ」

ジライヤ「ニヤニヤツ、ごめんニヤ、すぐ直すニヤ」

カチャカチャ（金具を留め直す音）

ああ…なんだか微笑ましいなあ…。

本編でやったら雰囲気壊れそうだったのでこの場で公開しました。

悪夢、そして自覚する罪（前書き）

今回、少々重い内容になっております。しかし、現実から創作の世界に來た主人公という設定に対する僕なりの考えにより、避け得ないものでありました。と言っても長谷川裕一先生の影響もあつてのものですが。

悪夢、そして自覚する罪

トライロバイトに着艦すると抱えていたコンテナからシートを剥ぎ取って下ろす。そして機体をハンガーに固定してコクピットを出る。傷病者搬送コンテナの側面ハッチが開き、ハンゾー達がヴィアさんを連れて出て来るのが見える。

「ご主人〜!!!」

声のした方を見るとワトソンとオモチが駆け寄って来た。

「おかえりニャ〜ッ!!!」

オモチがジャンプして僕の首にしがみつき頬擦りしてくる。

もふもふで気持ち良いけど今はそういう時じゃない。

頭を撫でてからオモチを降ろすと、ヴィアさんの方を見る。表情から見える感情は怯え、不安、というところか。さてどう説明するか。・嘘は良くないけど、何しろ僕らの素性からして常識外れだしねえ……。

「とりあえずヴィアさんをメディカルルームに。必要なら栄養剤の点滴も頼むよ」

ストレッチャーを運んで来ていた医務担当のアイルー達に指示を出してから、ヴィアさんに話し掛ける。

「僕達を不審に思われるのも当然でしょうけど、危害を加えるつもりはありません。安全な場所にお連れしますのでそれまで休んでいてください」

「貴方は一体なんなんですか？私を何処に連れていくつもりですか？」

「それは落ち着いてから話します。それに今は聞かない方が貴女の為だと思います」

そう言って格納庫を後にする。

とりあえず説明は後にしよう。艦に戻って安心したら急に疲労と眠気が襲って来た。艦内の個室に向かうと、オモチとワトソンがつい

て来る。

「ご主人これからどうしますニヤ？」

「予定通りクレイドルに帰る。それからヴィアさんに僕達の素性と目的を説明してクレイドルに滞在してくれるように頼んでみる」

「もし断られたらどうしますニヤ？」

「その時は、オーブのアス八家に接触して保護してくれるように交渉する事に・・・でも力ガリの事があるし上手くいくか・・・駄目だ、頭が働かない。部屋で休むから何かあったら起こして」

「わかりましたニヤ、それじゃブリッジで待機してますニヤ」

部屋の前でオモチとワトソンとわかれ、部屋に入る。ヘルメットをデスクの上に置き、スーツを脱いで内側に除菌スプレーを吹き付けてロッカーに仕舞い、シャワーを浴びて汗を流す。

タオルで体を拭いて下着を着けるとそのままベッドに潜り込んで、眠りに落ちた。

自分の周りに漂う血の臭い、足元にはいくつもの血溜まりと、白衣を血に染めた死体。

「ああ・・・そうか・・・」

これは僕が切り捨てた人達だ。

ブルーコスモスのテロが起こる事を事前に知っていながら。犠牲を防ぐ努力をしなかった。

メンデルで行われていた非人道的な研究を理由に死んでもいいと勝手に切り捨てた命。

全員は無理でもこの中の何人かは助けられたかも知れない。なのに、最初からヴィア・ヒビキだけ助けて他は見捨てるという前提で動いていた。

「何が命を踏みにじる者が自分の敵、だ。僕は・・・っ！」

直接手を下さなかっただけでテロリスト達と変わらない。そもそも僕は、ちゃんと彼らを人間として見ていたか？生前の感覚のまま物

語の中の死に役としか見ていなかったんじゃないか？

「今僕がこの世界にいる今、彼らは物語の中のキャラクターなんかじゃない、彼らだって、この世界に生きていたのに、僕は……」

見殺しにした。
いやちがう。

僕が死なせたんだ。

僕が殺したのと同じだ。

ボクガ、コロシタ。

「アアアアアアアアアアアアッッ！！！」

絶叫とともに跳ね起きる。

「ハア……ハア……夢……か……でも……その通りだよな……」

僕はとんでもない思い違いをしていた。

人が大勢死ぬとわかっていてその中の一人だけを自分の都合で連れ出してきた。

彼女の夫をも見殺しにして。その最期を看取る形になつたのはただの偶然だ。

「どの面下げてヴィアさんに会えばいいんだ……」

しかし逃げる事は出来ない。ヴィアさんにもあの研究所で死んだ人達に対しても無責任だ。

ちゃんと僕のした事を話さなければならぬ。それで彼女が僕達から離れるというなら望み通りにできるように努力しよう。その上で見殺しにした人達の死を背負って生きていこう。

自己満足かもしれないけど、彼らに誓おう。これから先、切り捨てる事無く、この手の届く限りの命を護っていくと。一度失ったこの命が再び尽きるその時まで。

悪夢、そして自覚する罪（後書き）

今回の話は長谷川裕一先生の「スタジオ秘密基地劇場」一巻に収録されている短編コミックが基になっています。原形留めてませんが。

謝罪、そして揺り籠にて目覚めし者達（前書き）

何かやっちゃった感の強い今回の話。しかし変えるつもりも無し。
細かい修正はするかもだけど。

謝罪、そして揺り籠にて目覚めし者達

トライロバイトは大気圏突入を成功し、現在は海中を潜航中である。そして僕は艦内のメディカルルームでヴィアさんに土下座している。「申し訳ありません！」

「あ、あの、どういう事ですか？」

「僕は、遺伝子研究所がブルーコスモスのテロリストに襲撃される事を事前に知っていました・・・ですがその一方である研究所で行われていた事も知りました。そして・・・貴女以外の研究員は、死んでも構わないと、思ってしまった・・・」

一言一言、口に出す度に苦しさを感じる。自分の罪の告白はこうも苦しいのか。しかし止める訳にはいかない。

「何故・・・私だけは別だったんですか？」

ヴィアさんの声は落ち着いている。

「貴女はあそこで行われていた研究に反対していた、そしてヒビキ博士に子供を奪われた被害者だと知ったからです。だから、貴女だけは、貴女の子供たちの為にも死ぬべきでは無いと、そう思ったんです・・・おこがましい考えでした」

「何故、面識も無い私や子供たちの事をそんな風に考えられたんですか？夫や他の研究員は切り捨てたのに」

痛い質問だ。この質問に正直に答えるという事は自分が異世界の人間だった事やキラやカガリの事のアニメで見ていた事を明かす事になる。荒唐無稽な話だから信じてもらえないとは思えない。しかし適当にごまかすわけにはいかない。考えた末、顔を上げ、ヴィアさんの目を見て口を開く。

「それは・・・言えば貴女を自由に出来なくなります。勝手なのは承知していますが・・・選んでください。これ以上は何も聞かず、僕達の事を忘れて元の社会に戻るか、真実を知り、僕達と共にキラ

やカガリを影から見守りつつ、メンデルで生まれた子供たちや理不尽に奪われる命を救う為に戦うか、二つに一つ。ただ、前者の方が楽だとは思いますが。ブルーコスモスに見つかりさえしなければ平穏に生きてけるでしょうし」

ヴィアさんの表情は険しい。当然だ。我ながら無茶苦茶を言っている自覚はある。質問に答えるどころか選択肢を突き付けているのだから。謝罪の話もどこへやら、だ。

でも正直な話この選択をしてもらわなければ、僕の素性は明かせない。ヴィアさんが信じる信じないに関わらず。そこは譲るわけにはいかないところだ。

しばし、メイカルルームを静寂が支配する。

「まるでキラとカガリの事をよく知っているように言うのね。その理由も、私が貴方に協力する事を選ばない限り話さない、という事ですか？」

「はい、ただし僕に協力してくれるのでしたら、話せる限りの真実を話します。決して嘘はつかないと誓います」

「・・・少し、考えさせてください。それともひとつ聞きたい事があります。夫は・・・ユーレンは最期に何か言っていますか？」

その質問に、正直に答えるべきか少し迷ったが、死者の最期の言葉を偽ってはいけないと思った。

「自分の研究成果、最高のコーディネイター・・・それがヒビキ博士の最期の言葉でした」

「そう、ですか・・・」

俯くヴィアさんの表情に心が痛む。彼女からすれば夫を信じたい気持ちがあつたのかもしれない。だとしたら僕の答えは望まぬ内容だっただろう。

そのとき、艦内放送が流れる。

「まもなく到着しますニヤ。ご主人はブリッジに来てくださいニヤ

」

ブリッジオペレーターのアズキの声だ。

この気まずい雰囲気から抜けられるから、ある意味良いタイミングではある。

「もうすぐ僕達の拠点に到着しますので失礼します。貴女がどちらを選ぶか決めるまでは客人として扱わせていただきます。それでは」
ヴィアさんにそう言い残してブリッジに向かう。

クレイドルの半球型の巨大ドーム型エレベーター、メイガスの門が既に海底の地表に現れていた。

ドームの中にトライロバイトを入れるとドームが閉じて排水を開始する。排水が終わるのを待っているとクレイドル内部から通信が入って来たのでモニターを映すと、クレイドルで待機していたオペレーターアイルーが出た。

「ご主人おかえりニヤさいですニヤ。早速ですけど異常事態発生ですニヤ。このクレイドルの人工冬眠施設が、ついさっき稼働状態になったのですニヤ！」

「……はい？」

どーいう事さそれ。人工冬眠施設は今のところ使う必要が無いから機能を停止して月1回点検するだけだったのに。

「し、しかもですニヤ、生体反応が4！中に4人、人間がいるんですニヤ！」

バカな！？クレイドル内に人間は僕しかいなかった筈。先月の点検の時も冬眠施設は無人だったのに！「ご主人早く戻って来て下さいニヤー！」

オペレーターアイルーはもう涙目になっている。確かに怖いよなあ。
「わかった、すぐ戻るからそれまで人工冬眠施設の出入り口は封鎖して誰も近づけないようにして待ってて」

そう言って通信を切る。

はあ、どうなってるんだ一体。

（視点変更）

マリンクレイドル1号内部人工冬眠施設。ここで4人の人物が目覚めました。

（…おや…、ここは一体…私はクリストフに敗れ死んだ筈ですが…）

（むう…連邦の施設ではなさそうだが…儂は何故こんな所に…？）

（ここは…まさかアースクレイドルの人工冬眠施設？しかし僕は…）

（あの時俺は崩壊するアースクレイドルと共に…しかし…それにこの身体は一体…）

己の置かれた状態に困惑する4人。

彼らと出会い、その原因を知った時、このクレイドルの主たる青年は頭を抱える事になるのだが、この時点では神以外にそれを予期できる者はいない。

謝罪、そして揺り籠にて目覚めし者達（後書き）

最近DS版魔装機神がやりたくなつたが部屋探しても見つからなかったため一昨日ソフマップで購入しました。しかし820円って安売りし過ぎ。金銭的にはありがたいがファンとしては少し寂しく感じました。

助っ人？いいえ、今はまだお客様です（前書き）

今回はご都合主義や一部人物の台詞におかしい所があるかもしれません。

後日修正入れるかも。

助っ人？いいえ、今はまだお客様です

クレイドルに戻ってヴィアさんを医療施設に移した後。

「え〜と…」

今僕の前にいる、人工冬眠施設に現れた4人。その全員が僕の知っている人物だった。と言っても面識は無いし、内一名は僕の知る容姿と違いがある。

以下順に名前を挙げる。

ダイテツ・ミナセ。

スーパーロボット大戦OGでスペースノア級万能戦闘母艦式番艦ハガネの艦長だった人物。OG2で戦死したのだが…。

次にゼオルト・ザン・ゼノサキス。

地底世界ラ・ギアスにある神聖ラングラン王国の剣術師範で予備役大佐。魔装機神サイバスターの操者、マサキ・アンドーの養父であり師匠でもある。シュウ・シラカワのグランゾンと戦ってこちらも死亡している。

クエルボ・セロ。

元はマン・マシン・インターフェースの研究者で、EOTI機関に移籍後、上司にあたるアギラ・セトメの指示の下「スクール」の生徒の記憶操作に携わっていた。

アイスクレイドルでのクロガネ隊との戦闘の最中にアギラに操られていたオウカ・ナギサの救出に協力。その後マシンセルによってアイスクレイドルに取り込まれ死亡した。

そして最後の1人。

ウォーダン・ユミル。

OGの世界とは別の並行世界の特殊部隊シャドウミラーによって生み出された戦闘用人造人間Wシリーズの15号。自分に転写された人格のオリジナルであるゼンガー・ゾンボルトとの戦いに敗れた後、ソフィア・ネートを救う為に特攻して死亡した。のだが、ここにいるウォーダン・ユミルの容姿は黒髪黒眼と、髪と瞳の色が変わっている。しかも本人が言うにはその身体はWシリーズで無く人間のそれになっているらしい。

つまりクレイドルの人工冬眠施設に現れたのはバンプレストオリジナルの、死亡している人物たちだった。こんな事が出来る心当たりは1人しかない。4人とも丸腰だったが、武術の達人が2人いるのでハンゾー達四匹に見張らせながらコントロールルームに向かった。

「遅いぞ。神である私を待たせるでない」コントロールルームに入った直後、正面のモニターが映り、神が顔を出した。で開口一番で文句ですか。

「この計ったようなタイミング、やっぱりアンタですか？この4人をここによこしたのは」

「想像できていたか、まあ実際そなたの知る限り、死んだ者を生き返らせて別の世界に送ることが出来るのは私だけ。当然か」

「何考えてんですか？事前の連絡もなしに送って来たからアイルー達が怖い思いしたでしょうが！」

「いや最初の介入もとりあえず一区切りついたようだったからな。次の介入の為に人員を少しばかり回してやろうと思ってな。スパロボのキャラクターで死亡している者の中からとりあえず4人選んでやったのだ」

「何でいきなりやりますか？」

「思い立ったが吉日、というのだろう？人間の間では」

「やる前に一言連絡くださいって！」

あゝもう。駄目だこの人（神）。文句言っても無駄か。

「で、当の本人達は状況飲み込めて無いみたいですけど？」

「うむ、ではその4人聞くが良い、簡単に説明するとだな、これからその若造を手助けしろ。という事だ。その世界の状況と今後の行動についてはそいつに聞け。以上」

うわ、簡単過ぎ。大丈夫か？

後ろを振り返って4人の様子を見ると…うわ、ダイテツ艦長は考え込んでるし、ゼオルートさんは困った顔。セロ博士は表情が暗いし、ウォーダンに至っては凄いしかめっ面だよ。

「おおそうだ。これから先何かあったら私に連絡するが良い。今と同じようにクレイドルのコントロールルームから私に繋がるようにしておいてやる。ではな」

そう言って神様はモニターから消えた。

「えっと…とりあえず場所を変えて話しません？」

僕は4人にその声を掛けた。

そして所変わって食堂でこの世界の事を説明する。

「と、言う訳で、この世界ではコーディネーターとナチュラルの2つの人種間の確執が年々悪化してしまして、それが原因のテロも頻発しています。いずれは互いに滅ぼし合うまでになります。確実に」

「ふむ…根深い問題だな」

ダイテツ艦長がお茶を飲んで呟く。

「遺伝子操作の是非だけでなく、互いの能力の優劣からくる反発、それ以外の政治的問題が確執を深めている訳ですね」とセロ博士。

「更に軍産複合体と政治家や軍高官の癒着か」

こちらはウォーダン。

「人の憎悪というのは一度火がつくと際限なく広がってしまうものです。悲しいことですが…」

とゼオルートさんが漏らす。

「残念ながらこの世界では一部の人間の個人的な憎しみや欲望が暴走して世界に広がる土壌が出来上がってしまったているのでしょう。」

マサキ・アンドーのように個人の感情や一国の利益を超えて世界の為に動ける人間は余りにも少なく、また非力と言わざるを得ないでしょう」

「おや、貴方はマサキを知っているんですか？」

「ええまあ、面識は無いですけど」

「ほう、ゼオルート大佐、貴官はマサキ・アンドーの知り合いですか」

「おやダイテツ中佐もマサキをご存じですか。いや実はですねえ……」
「あゝちよつとその話しは後で改めてお願いします」

ダイテツ艦長の言葉に興味津々といった様子のゼオルートさんだが、放っておくと話しがそれてしまう。

「今地球上で蔓延しているS2インフルエンザもコーディネイターの死者がゼロだった事からS2インフルエンザの蔓延はプラントのナチュラル殲滅の為の作戦だなんて噂が流れて反コーディネイター感情がますます強くなっています。北米を中心とする大西洋連合は戦闘用コーディネイターなんてのを研究していますし、コーディネイターに対抗するための身寄りの無い子供を使った非道な人体強化研究も行われています」

「！？それは……」

「そうですセロ博士。かつてアドラー・コッホがスクールの子供達にしたような、もしかしたらそれ以上に酷い行いが秘密裏に行われているんです。これから先コーディネイターとナチュラルの確執はそれを是としない人々すら巻き込んで多くの犠牲を生み出していきます。僕はその犠牲を減らしたいんです」

席を立ちこの場にいる4人に頭を下げる。

「お願いします。僕に力を貸してください！僕は少し前にあるテロ事件に介入しました。ですがそこで僕が救ったのはたった1人でした。その1人のために他の大勢を見捨ててしまった。僕1人じゃ力

が足りないんです。お願いします！」

しばしの沈黙の後、口を開いたのはダイテツ艦長だった。

「即答は出来ん。ワシはまだこの世界の事をあまり知らんからな」

「己の剣を振るう理由は俺自身で決める。しばし貴様の行く道を見定めさせてもらう」

ウォーダンも答えは保留と言う事か。

「私は協力してもいいと思いますが、少し時間を頂けますか？」

ゼオルトさんは脈ありかな。

「僕は…協力したいと思います。スクールでの僕の罪を償う為に」
セロ博士は協力してくれるようだ。

「ありがとうございますセロ博士。ダイテツ艦長やウォーダンさんにゼオルトさんも、無理強いはしません。結論が出るまでは客人として対応させていただきます」

ヴィアさんも含めてお客が4人、協力者が1人、か。

ん？そう言えばもしダイテツ艦長達が協力を拒否した場合どうなるんだ？

神様に聞いてみるか。

助っ人？いいえ、今はまだお客様です（後書き）

人物が増えると会話が難しいです。

次の行動目的決定（前書き）

今週は何時もより遅くなりました。そして多分今までで一番の駄文。
トホホ。

次の行動目的決定

ヴィアさんをクレイドルに保護して、ダイテツ艦長達がクレイドルに来てから一週間。

協力を申し出てくれたセロ博士にはヴィアさんの話し相手をしてもらっている。彼もまた研究者であり自身の（というか上司の）研究に良心の呵責を感じていたわけだし、話し相手になるだけでもヴィアさんのメンタルケアになると期待している。

僕はというと、メンデルの件以前より少し軽めの訓練にシフトしている。

現在地球はS2型インフルエンザが蔓延しているが、これには手出しのしようが無い。神様にワクチンを用意できないか聞いてみたのだがこの件は人災では無く天災であるため神は手出ししないと言う答えだった。って事は少なくともこの世界のS2型インフルエンザは本当に自然発生したもので、プラントはあらぬ疑いをかけられた事になる。

まあ、死者は全てナチュラルでコーディネイターの死者は出ていないという状況から疑惑が生じるのは仕方ないのかもしれないが。故にS2型インフルエンザについては介入不可能という事になるため、今は将来に備えて力を蓄える事になった。

そして今日は訓練は休みその代わり農業プラントの巡回をする日である。

で……。

「ご主人そっち行ったニヤ！」

「コケーッ！！」

「おわっ痛い痛い！」

鶏相手に苦戦しております。

何故こんな事をしているかと言うと、鶏舎の卵が孵り、大量のヒヨコが生まれたからである。卵の管理に手違いがあり、ヒヨコの数

予定より多くなってしまったのだ。

まあヒヨコは可愛いのだが、このまま育つと鶏の数が増えすぎて数の管理やら餌やらに問題が生じる。その為現在居る鶏を間引く事になったのだ。で、産卵成績の低い鶏から淘汰するわけだが……。

「こんなに苦勞するとは……」

鶏と言うのは捕まえるのが大変なのだ。

なかなかにすばしこく、更に爪と嘴と言う武器を持っているのだ。

本能で身の危険を感じ取ったのかと思うくらいに、鶏達の抵抗は激しかったが、なんとか成績の低い鶏を他と分ける事が出来た。そしてここからが重要なところ。

「それじゃあご主人…これを」

そう言つてアイルーの一匹が差し出した幅広の肉切り包丁を受け取る。

そして別のアイルーが抑えている鶏の首を掴むと台の上に抑えつける。

「ご主人、思い切つていくニヤ」

「わ、わかつてる……」

台の上で抑えつけられてバタバタともかく鶏に躊躇する。が、これが出来なければ僕は……。

意を決して肉切り包丁を振り下ろす。

「ごめん！」

ドンツという音を立てて肉切り包丁の刃が鶏の首を骨ごと切断する。瞬間、飛び散る鮮血が僕の着ている青の作業着を汚す。

首を落とされた鶏はまだ神経が生きているため羽根と足をバタバタと動かすが、徐々に動きは弱まり、やがて完全に動かなくなる。

「ご主人、後は僕たちがやりますニヤ」

「あ……でも……」

「今のご主人じゃ手元が狂いそうで危なっかしいですニヤ」

「う……」

実際その通りで、心臓はバクバク音を立てているし手は震えている。

肉切り包丁から右手に伝わった鶏の首の肉と骨を断ち切る感触が、鶏を抑えていた左手の手袋にべったり付いた血が、僕のこの手で命を絶った事を実感させる。

「ご主人、今日はもう良いですニヤ？」

「うん…いや、せめて最後まで見せて欲しいな。僕が殺した鶏がどうなるか…」

首を落としてはいい終わり、じゃ簡単過ぎる。最後まで見届けないといけない。僕はそう思った。

その後はアイルー達が、首を落とされた鶏の羽根をむしり、内臓を抜き、血抜きをしてから部位ごとに切り分けるのを最後まで見届けた。

これらの鶏達の肉は今回は燻製にして保存し、内臓は今夜の夕食に使われるとの事だ。自然と鶏達に向かつて合掌していた。

僕は君達の命を貰ってこれからも生きていく。ありがとう。そしてごめんなさい。そう心の中で感謝と謝罪をして、血まみれになった作業着と手袋を着替えるため、その場をあとにした。

そして夕方。僕はヴィアさんの部屋を訪ねていた。部屋にはセ口博士もいて、話し中だったようだ。

「こんにちは、ヴィアさん。体調はいかがですか？」

「え、はい、おかげさまで大分良くなりました」僕の質問に返事を返すヴィアさんだがその表情は優れない。僕はセ口博士に耳打ちする。

「実際の所どうなんです？」

「身体的には回復してはいますが、無気力というか、どうも生きる目的を失っているようです」

「やっぱりメンデルでの事で？」

「加えて、自分の子供達に対する罪悪感もあるようで…」

無理も無いか。事情はどうあれキラと力ガリを手放した訳だから親として罪悪感残るよなあ。しかしこのままでは…。

よし、もう少し時間を置くつもりだったけど、計画を前倒しで実行するか。

そして夜、食堂。

僕、セロ博士、ヴィアさん、ダイテツ艦長、ゼオルートさん、ウォーダンさんがテーブルを囲んでいる。

「それで、何故急に鍋などと言い出したのだ？」

テーブルの上の電気コンロにかけられた土鍋を見ながら尋ねる。

「たまにはみんなで鍋つてのも良いと思ひまして。それと次の行動が決定したのでその発表も兼ねて」

「ワシ等はまだ君に協力するとは言っておらん」

「それはそれで別の話です。取って置きも用意してるんですよ」

そう言つてテーブルの上にガラス瓶をドンと置くと、ダイテツ艦長の目つきが変わる。

「む！それはもしや！？」

「そう、ダイテツ艦長のお気に入り、大吟醸振袖です。嗜好品のプラントに参考として保管してあるのを一本だけ貰つて来ました。飲みません？」

「君に協力するしないは別の話と言つたな？」

「ええ、別の話です」

しばしの沈黙。そして。

「たまには鍋を囲むのも悪くはあるまい」
ダイテツ艦長が折れた。

「いやあ、いつか家で食べたスキヤキを思い出します」

とゼオルートさん。　　ていうかラングランで妙に日本の文化が入っているような。やっぱりシュウ・シラカワの母親の影響だろうか？

「鍋、というのは良く知らないのですが…」

とセロ博士。

「あの、何故私まで？」

「今後の行動というのはメンデル絡みですから、伝えた方が良く」と

思いまして」1人戸惑いを見せるヴィアさんに返事を返す。

「何故鍋が2つある？」

ウォーダンさん、あなた気にする所そこですか。

「今日は片方は鶏鍋です。でもう片方は鶏もつ鍋という事で。もつに馴染みの無い人のために分けさせてもらいました」

さて、と言って立ち上がると周囲を見回して、口を開いた。

「食事の前に今後の行動目的を発表します。それはカナード・パルス of 搜索です」

僕の言葉に5人全員が「誰それ？」という表情になる。まあこの名前を知っているのは僕だけだから当然だけど。

「説明します。カナード・パルスとはL4宙域のコロニーメンデルにある研究所で行われていた人工子宮の研究過程で生まれた子供で、研究者のユーレン・ヒビキ博士に失敗作としてユーラシア連邦軍に売り飛ばされ、恐らくはモルモットのように扱われていると思われます」

僕の言葉にヴィアさんの顔色が変わる。ここに呼ばれた意味が理解できたのだろうか。

「あの子が…私のもう1人の子供が…!？」

「ええ、これは私見ですが、ユーラシア連邦軍は大西洋連合ほどにはブルーコスモスに染まっていなと思います。良くも悪くも、ですが」

「どういう事だ？」

ダイテツ艦長が話に入る。

「先日お話したように大西洋連合はブルーコスモスのパトロンでもあるアズラエル財団とべったり癒着していて、軍高官にもブルーコスモスのシンパが少なからず存在してます。彼らの主張によればコーディネイターは滅ぼさなければならぬ敵であり、人間では無いという事になります。ですがユーラシア連邦は水面下で対立関係にある大西洋連合に対抗するためならばコーディネイターだろうが利

用出来るものは利用してやろうという考え方のようです。カナードも将来的には兵士として利用するつもりでしょう」

僕の知る限り、ユーラシア連邦のガルシア少将はキラ・ヤマトを引き込もうとしたり、アルテミスの防衛にコーディネーターの傭兵（叢雲劾とイライジャ・キール）を雇ったり、カナードを特務兵として扱ったりと、大西洋連合の高官のような病的なコーディネーターアレルギーとは違って見えた。

良くも悪くも使えるならナチュラルもコーディネーターも関係ないというイメージだ。無論ユーラシア連邦軍全てがそうではないだろうが、ヤキン・ドゥーエ戦役終盤に脱走するまでカナードが曲がりなりにも五体満足に生きていられたわけだし。

「ですが、子供が自分の進む道を選択する事も出来ないまま兵士となり、戦場で殺し合いをする。それで良いんでしょうか？僕はそれは間違っていると思います。それは人の生き方じゃ無い。人は誰だって自分で自分の道を選ぶ権利がある筈です！」

自分で言ってるんだか演説みたいになってしまったなそろそろ切り上げないと。

「長くなりましたが、僕はこれから先の活動の第1歩として、カナードを探し出し、自分で生き方を選ぶ自由を彼に返してあげたい。それが当面の僕の活動目的です」

ジャード・ベネルディとガーネット・サンディがラトウニ・スウボータを救ったように。

「それでは、この話はここまで！食べましょう！飲みましょう！」半ば強引に話を切り上げ、5人に酒を注いで回って。

「それでは、いただきます」

席に戻って合掌する。さあ食べるか、と思った時、

ガターン！と音を立ててウォーダンさんがテーブルに突っ伏した。

慌ててウォーダンさんの様子を診ると…

「酔いつぶれてる…」

こんなところまで親分に似なくても…。結局ウォーダンさんを覗

いた4人と銅をつついたのだった。

次の行動目的決定（後書き）

次回からはまた介入準備に入ります。

ところでS2型インフルエンザって本当の所どうなんでしょう？ナチュラルだけ死ぬって所を見るとプラントが怪しく思えるのも無理ないですけど、もしプラントがナチュラル殲滅するつもりだったらワクチン提供しないですよ。公式には曖昧なままなので、この作品の世界では自然に変異したという事になっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2030v/>

コズミック・イラにスパロボOGの機動兵器を持って介入する。

2011年10月7日13時11分発行